

〈研究報告〉

## 地域社会における持続可能な観光の促進を目的とした 短期プログラムの構築

長野 はな  
大塚 薫  
マイケル・シャープ

### 要 旨

本稿は、2023年7月3日(月)～28日(金)に開催された高知大学サマープログラムの実施報告である。本プログラムは、高知大学の学生と協定校の学生との交流を通じ、キャンパスの国際化を図ることを目的として実施された。共通教育科目「Japanese Studies I・II」(各2単位・集中講義)として開講し、本学学生8名に加え、米国の協定校のカリフォルニア州立大学フレズノ校(以下、フレズノ)から3名、英国の協定校のセントラル・ランカシャー大学(以下、UCLAN)から1名が短期交換留学生として参加するとともに、スウェーデンの協定校のイエーテボリ大学からの交換留学生2名も参加し、計14名が履修した。本プログラムは英語で実施され、参加学生は、日本語及び日本文化について学ぶとともに、高知県内各地へのフィールドトリップを通じて、高知県における持続可能な観光分野での取り組みについて学んだ。

### 【キーワード】

キャンパスの国際化、持続可能な観光、国際共修、日本語、日本文化

### 1. はじめに

2023年、高知大学サマープログラムが再開した。本プログラムは、高知大学の協定校の学生が日本を訪れ、言語や文化を学ぶとともに、県内各地でのフィールドワークを通じて、高知大学の学生と協力しながら様々な課題に取り組む機会を提供する1ヶ月間のコースである。

このプログラムは、土佐さきがけプログラム国際人材育成コース教員のイニシアティブにより2014年より開始された。初回は、マレーシアプトラ大学の様々なプログラムで学ぶ学部生6名が参加した。さらに、2015年から2019年にかけてプログラムが実施され、米国のロードアイランド大学、カリフォ

ルニア州立大学フレズノ校からも参加者があった。高知大学の学生がティーチングアシスタントを務める語学授業のほか、参加者は落語や合気道の講義を受けるとともに、竹林寺、土佐清水市のジョン万次郎資料館、いの町の紙の博物館など県内各地の名所を訪ね、様々なアクティビティに参加した。

2020年から2022年にかけては、世界的なパンデミックの影響により中断を余儀なくされたが、グローバル教育支援センター（Global Education and Advancement Support Center, 以下GEASC）の主催で2023年に再始動した際には、過去のプログラムから得られた知見が大いに活かされることとなった。

2023年度の参加者4名（英国・セントラル・ランカシャー大学から1名、米国・カリフォルニア州立大学フレズノ校から3名）は7月初旬に到着し、高知県での1ヶ月間の滞在を開始した。この間、参加者は日本語や日本及び高知の文化を学び、持続可能な観光（サステナブル・ツーリズム）をテーマに市内の観光名所や周辺地域でフィールドワークを行い、高知大生と協力してさまざまな課題に取り組んだ。

高知大学の学生も集中講義として開講される共通教育科目「Japanese Studies I・II」に履修登録し、協定校の学生と一緒に授業を受けることができた。2023年度は日本人学生8名及びスウェーデンの協定校イェーテボリ大学からの交換留学生2名が履修登録し、プログラム全体の参加者数は14名であった。

本プログラムは、10年にわたり本学学生と協定校の学生との交流の機会を提供してきており、本学にとっても協定校との交流協定を維持するための貴重な手段となっている。

## 2. サマープログラムにおける日本語授業

今回実施されたサマープログラムでは、協定校から参加した4名の学生に対して16コマ分の日本語授業が提供された。以下、今回開講された日本語授業の詳細について述べていく。

### 2.1 サマープログラムにおける日本語授業の概要

日本語授業は、4名の学習者のレベルに応じて2クラスで編成され、初級レベルにフレズノからの学生3名、中上級レベルにUCLANからの学生1名が受講した。日程は、表1・表2の通りで一日に2コマ（90分×2コマ）ずつ、計8日間にかけて全16コマの授業が行われた。Japanese Studies Iとして

は、第1回(7/03①)から第12回(7/14②)までの全12回分が、**Japanese StudiesII**としては、第13回(7/19①)から第16回(7/21②)までの全4回分が設定された(表1・表2参照)。

**Japanese Studies I・II**は、日本人学生と協定校からの留学生とが同等の立場で学び合う国際共修授業<sup>1)</sup>として開講された。そのため、留学生対象の日本語授業に日本人学生も共に参加し、ネイティブ話者として会話やロールプレイの練習や日本文化に関する情報の提供、発表のサポート等の役割を担った。日本人学生は、他に受講している授業と重ならない時間帯に設定された日本語授業に少なくとも4回以上参加し、留学生の日本語学習のサポートを行うこととした。授業が重なり日本語授業に参加できない日本人学生は、**Japanese Studies I・II**を履修している交換留学生に対し、個別の学習チューターとして交換留学生の求めに応じ日本語学習のサポートを行った。

学習者のレベルについては、初級授業の学生は、フレズノで1年間から2年間日本語を教養として学習してきた学生で、簡単な日本語でコミュニケーションを取ることが可能な日本語能力試験N5～N4レベルの学生であった。中上級授業の学生は、大学院で日本語通訳に関する分野を専攻しており日本語能力試験N2レベルの学生であった。学習者のニーズとしては、前者が日本における日常生活を経験し、日本の文化や習慣について学び日本語力を向上させるとともに日本人学生との交流の機会を期待していた。後者は、将来日本で通訳として働くことも視野に入れ、ビジネス日本語を学習することを希望するとともに、日本の言語文化、特に若者言葉や方言に興味があり、通訳になる際に役立つ情報の収集を望んでいた。そのため、学習者のニーズに合わせて表1・表2の★で示したように日本人学生とのピア・ラーニング活動を2コマ続きの授業中1コマは設定し、インタラクティブなコミュニケーション活動を取り入れた授業構成にした(表1・表2参照)。

初級授業では教科書として『まるごと』を使用し、日本の文化を通じて自然な日本語が学べるよう工夫した。日常生活において身近な話題である趣味や季節、私の町、食べ物等自ら発信してコミュニケーションやディスカッションができるテーマを学習し、既習の日本語を駆使して実践的な対話を試みた。中上級授業では、日本における留学生の就職事情を学ぶとともに、日本人学生とロールプレイをしながら、名刺交換や電話での対応、上司や同僚への情報の確認等ビジネスシーンで有効なコミュニケーション方法を実践的に身につけた。それぞれのクラスには日本人学生も参加し、一緒に会話練習を行う

等留学生の日本語学習をサポートした。

表1 初級授業内容

回	実施日	授業内容	回	実施日	授業内容
1	7.03①	オリエンテーション・自己紹介 ★日本人学生とのピア・ラーニング活動Ⅰ	9	7.12①	外国語と外国文化
2	7.03②	趣味・★日本人学生とのピア・ラーニング活動Ⅱ	10	7.12②	参加してみたい課外活動・★日本人学生とのピア・ラーニング活動Ⅵ
3	7.05①	発表「日本人の友達」・季節	11	7.14①	食べる
4	7.05②	天候・★日本人学生とのピア・ラーニング活動Ⅲ	12	7.14②	「高知の美味しいもの」・★日本人学生とのピア・ラーニング活動Ⅶ
5	7.07①	私の町	13	7.19①	発表「私のおすすめ料理」
6	7.07②	道案内・★日本人学生とのピア・ラーニング活動Ⅳ	14	7.19②	復習・★日本人学生とのピア・ラーニング活動Ⅷ
7	7.10①	発表「私の町」・待ち合わせ	15	7.21①	最終発表「高知で経験したこと」・★日本人学生とのピア・ラーニング活動Ⅸ
8	7.10②	行きたい場所・★日本人学生とのピア・ラーニング活動Ⅴ	16	7.21②	フィードバック・★日本人学生とのピア・ラーニング活動Ⅹ

★日本人学生参加授業

表2 中上級授業の内容

回	実施日	授業内容	回	実施日	授業内容
1	7.03①	オリエンテーション・日本の雇用環境	9	7.12①	日本の採用文化・挨拶のスキル：名刺交換
2	7.03②	★日本人学生とのピア・ラーニング活動Ⅰ	10	7.12②	★日本人学生とのピア・ラーニング活動Ⅴ
3	7.05①	留学生の日本企業への就職事情	11	7.14①	就職活動のスケジュールと準備・挨拶のスキル：自己紹介
4	7.05②	★日本人学生とのピア・ラーニング活動Ⅱ	12	7.14②	★日本人学生とのピア・ラーニング活動Ⅵ
5	7.07①	日本企業が求める留学生とは	13	7.19①	日本で就職するためには・聞き取りのスキル：電話対応（伝言）
6	7.07②	★日本人学生とのピア・ラーニング活動Ⅲ	14	7.19②	★日本人学生とのピア・ラーニング活動Ⅶ
7	7.10①	留学生OB・OGから見た就職活動	15	7.21①	聞き取りのスキル：情報の確認
8	7.10②	★日本人学生とのピア・ラーニング活動Ⅳ	16	7.21②	★発表（日本人学生とのロールプレイ）

★日本人学生参加授業

## 2.2 サマープログラムにおける日本語授業の評価及び考察

今回行われた日本語授業では、全16回の授業終了後に4名の日本語学習者に対し、「授業終了アンケート」調査を実施した。アンケート項目は、「授業の満足度」、「授業の利点・改善点」等を挙げた。感想や意見の記述以外の客観的な評価項目は、「十分」が5点、「かなり」が4点、「普通」が3点、「あまり」が2点、「不十分」が1点の5段階で評価してもらった。

その結果、今回の授業に対する学習者の評価は、5段階中平均で4.61であり好評価を博した(表3参照)。特に、学習者の授業に対する積極性と出席度、学びの習得度と日本語力の向上、教員の教授法、教員の学生の困難点に対する理解、教員の課題の説明、教員の熱心度、授業の満足度は平均で4.8以上であり、学生のニーズに即した授業が展開されたことが分かる。一方、評価の低かった項目としては、教材の難易度が「易しすぎる」との理由で3.0、授業の難易度が「比較的易しい」との理由で4.0であった。これは、初級授業に参加した学生が既修者であり、既に学習済みの事項が多かったこと、3名の受講者の中でレベル差があったことに起因する。

表3 日本語授業の評価

	5	4	3	2	1	平均
1 授業に対する積極性	3	1	-	-	-	4.8
2 授業への取組度	-	4	-	-	-	4.0
3 授業への出席度	4	-	-	-	-	5.0
4 学びの習得度	3	1	-	-	-	4.8
5 日本語力の向上	4	-	-	-	-	5.0
6 授業の難易度	2	-	2	-	-	4.0
7 授業の課題量	3	-	1	-	-	4.5
8 教材の難易度	1	-	2	-	1	3.0
9 教員の教授法	4	-	-	-	-	5.0
10 教員の学生の困難点に対する理解	4	-	-	-	-	5.0
11 教員の課題の説明	4	-	-	-	-	5.0
12 教員の熱心度	3	1	-	-	-	4.8
13 授業の満足度	4	-	-	-	-	5.0
平均						4.61

学習者の授業に関する感想としては、「このクラスは本当に楽しかった！とても楽しく、とてもためになり、とても深い内容で、毎回の授業が楽しかった。授業の焦点は日本語の会話で、毎回授業が終わると、学んだことをすぐに使うことができた。学んだことは、他のキャンパスでの活動や友達と遊んでいるときにも生かすことができた。このクラスがなかったら、日本でこんなに楽しい時間を過ごせなかったと思う。教科書のワーク、会話の実践、そして質問など授業自体はとても楽しかった。また、ゲームやアクティビティも多く、授業のペースについていけるように配慮してくれた。教授はとても忍耐強く、どんな質問や文法的な興味にも対応してくださり、とても感謝している（フレズノの学生）」、「このクラスは、日本語を1、2科目しか習ったことがない人にとって、とても良いクラスだと思う。非常に親切で、学生が何か質問すれば、コンセプトやアイデアを詳しく説明してくれた。さらに数クラス受講したことがある人にとっても、クラスでは素晴らしい洞察と情報が提供された（フレズノの学生）」、「すべてがとても役に立っている！（フレズノの学生）」、「大変ありがとうございます！先生のおかげで毎回授業を楽しみました（UCLANの学生）」という声があり、授業に対する学生の満足度が高いことを示している。

また、授業の良い点としては、「顔を合わせての交流やディスカッションは、このクラスの最大の利点だった。どう言えばいいのか、どうすればもっと自然な言い回しになるのか、お互いに尋ねることができるのは、教科書からは学べないことだ。教科書やオンラインコースのスピーチがいかにも不自然なものであるかは知らなかったが、実際に日本語を母語とする人たちとコミュニケーションをとることで、自然に感じられる小さなマナーを拾い上げ、学ぶことができた。その上、様々な話し方やアクセントのおかげで、リスニング力を鍛えることができた（フレズノの学生）」、「日本語学習のアプローチに役立つ情報やアイデアが盛り込まれた、親しみやすい（分かりやすい）クラス（フレズノの学生）」、「先生は、日本語を話すとき、どんな間違いも直してくれた（フレズノの学生）」、「私にとって、自分の考えをどうやって伝えれば良いかにいつも悩んでいる。そのため、毎回気軽に会話をするチャンスがあったのは本当に役に立った。どんどん私の話力が上達していき、少し自信がついた（UCLANの学生）」という感想を述べており、同世代のネイティブ話者とのコミュニケーションも含め実践的な内容で授業が行われ、日本語力の向上が感じられたとの感想から学生と教師間ならびに学生間で活発なインタラ

クティブがなされていることがうかがえた。

改善点としては、「問題や改善の必要なし（フレズノの学生、UCLANの学生）」という意見がある一方、「話すことに重点を置いていて、日本語の書くことに重点を置いていなかった。でも、読み書きは特に好きなので、もっと時間が欲しかった。時間が限られていることは理解しているし、その制限の中で取り組んだ（フレズノの学生）」、「個人的には、授業はほとんど自分のための復習だった。しかし、それでもコースで日本語を使う機会は有益だった（フレズノの学生）」という感想があり、四技能をくまなく学習したかったという意見とともにより高いレベルの日本語が学びたいという声があった。

以上のように、サマープログラムにおける日本語授業に関しては、学習者のニーズに即した授業を開講したため、学習者の満足度が高く高評価を得たと言える。特に、日本人学生の参加により学んだ日本語をすぐに実践的に使用することができ、日本語力の向上に繋がったことがうかがえた。また、授業に参加した日本人学生にとっても実際の日本語教育の現場での教授方法を学べる良い機会になるとともに日本語学習をサポートする機会にもなり、互恵的な学びの場になったと考えられる。

### 3. 日本文化講座

日本文化講座は、高知大学教員及び外部講師により全て英語で実施された。本年度のプログラムでは、多様な日本文化の中でも特に日本映画、尺八、生け花、剣道、俳句に関する講義またはワークショップを実施した。

#### 3.1 日本文化講座の内容

##### (1) 日本映画

20世紀初頭まで遡ることができる日本の豊かな映画史をテーマに、グローバル教育支援センター・マイケル・シャープ准教授が、日本映画の進化について、旅回りのマジック・ランタン・ショー、ユニークな弁士の伝統、そして時代劇・チャンバラ、現代劇、特撮怪獣、アニメ、メカなどの主要な映画ジャンルについて探求した。前述の通り、アニメは近年の日本における最も重要な文化輸出のひとつであり、この講義の目的は、日本映画がいかに西洋の映画製作に影響を与え、また影響を受けてきたかを示すことであった。

##### (2) 尺八

高知大学医学部の講師であり、尺八の名手でもあるダニエル・リュウドウ

氏が、参加者に日本の伝統楽器を紹介するワークショップを行った。参加学生は、管楽器（尺八）、打楽器（太鼓）、弦楽器（琴、三味線）について学んだ後、それぞれ尺八を吹き、実践を通じて演奏方法を学んだ。

### （3）生け花

ポーラ・ファビアン氏を講師に招き、ワークショップ形式で実施した。まず、生け花の用語や基本原理などに関する説明の後、講師がデモンストレーションを行い、学生たちは花の生け方を学んだ。その後、講師の指導のもと、各学生が実際に生け花を制作した。

### （4）剣道

剣道八段の矢野宏光教育学部教授による剣道のワークショップを実施した。矢野教授が剣道家の行う礼法、足の運び方、打ち方などを披露した後、各学生が竹刀を持って実践した。

### （5）俳句

外部講師を招き、ワークショップ形式で実施した。俳句ワークショップに限っては、サマープログラム受講者だけではなく、他の本学学生も参加できるように「カルチャーカフェ」（GEASCが不定期で実施する国際交流イベント）の一環として開催した。まず、外部講師より俳句の基本知識、どのように俳句を詠めばよいのかが説明された。受講者は、それぞれ日本語で俳句を作成し、講師がその中から優秀な作品を選出、発表した。

表4 日本文化講座日程

日付	内容	講師
7月4日（火）	日本映画	マイケル・シャープ
7月7日（金）	尺八	ダニエル・リュウドウ
7月11日（火）	生け花	ポーラ・ファビアン
7月14日（金）	剣道	矢野宏光
7月19日（水）	俳句	HAIKU TIME (高知県内の俳句団体)



#### 4. フィールドトリップ

フィールドトリップは、「高知県の持続可能な観光分野の取り組み」をテーマとして、県内各地を訪問した。本プログラムを履修している高知大学生は、平日は他の授業があるため、終日参加が可能な週末を中心に実施した（表5参照）。

国連世界観光機関（UNWTO）（2005）によると、持続可能な観光（サステイナブル・ツーリズム）とは、「訪問客、業界、環境および訪問客を受け入れるコミュニティのニーズに対応しつつ、現在および将来の経済、社会、環境への影響を十分に考慮する観光」を指す。本フィールドトリップでは、参加学生は高知県内の観光促進に取り組む施設や団体への訪問、現在の取り組み状況や課題の分析を通じて、持続可能な観光の促進について考察を行った。

##### 4.1 フィールドトリップにおける活動内容

###### （1）香南市赤岡町：絵金蔵及び絵金祭り見学

江戸後期に活躍した絵師・絵金の作品を保存、公開している文化施設・絵金蔵にて、絵金の生涯や作品について学んだ後、赤岡町で毎年7月に開催されている絵金祭り（絵金の屏風絵などが商店街の通り沿いに屋外展示される。県内外から多くの人々が訪れる）を見学した。絵金祭りでは、屏風絵展示の他にも、町民歌舞伎や地元酒蔵の開放などが開催されており、町民が主体となり、工夫をこらした町おこしの取り組みが行われている様子を視察した。

###### （2）土佐清水市及び宿毛市大月町

7月16日は高知県西部の足摺岬国立公園、大月町文化教育交流施設COSAを訪問した。COSAは、廃校となった小学校を改装し、地域内外の人々の教育交流を推進する拠点として2023年3月にオープンした町営施設である。その際、行われた講義では、COSA運営メンバーより、周辺海域での海洋生物及び環境保護の取り組みや教育活動について学んだ。翌日は、観光スポットとして人気のある大月町柏島にてシュノーケリングを行い、海中の様子を観察するとともに、柏島で行われているマグロの養殖場など島内を視察した。

###### （3）高知市：桂浜及び五台山

高知県の主要な観光スポットである桂浜、五台山の竹林寺、高知県立牧野植物園を訪問し、高知県の歴史や文化について学んだ。桂浜で坂本龍馬像や海津見神社を視察した後、五台山に移動し、竹林寺を訪問するグループと牧野植物園を訪問するグループの二手に分かれて視察を行なった。竹林寺を訪

問したグループは、写経、瞑想体験を行い、住職の案内で本堂を訪問した。牧野植物園を訪問したグループは、高知県出身の植物学者・牧野富太郎に関する展示や庭園など、それぞれ園内を自由に散策して高知県や日本の植物について学んだ。

#### (4) 安芸市及び室戸市

午前中は、安芸市の伊尾木洞を訪問し、地元のボランティアガイドから伊尾木洞の歴史や保全、エコツーリズム実現に向けた取り組みについて学んだ。午後は、室戸市に移動して、ユネスコ世界ジオパークに認定されている室戸岬を訪問し、地元のボランティアガイドから地形や植物についての説明を受けた。その後、廃校を利用した施設であるむろと廃校水族館を視察し、館長から同水族館の成り立ちや地元住民との関わりについて話を聞き、自然や廃校といった資源をどのように観光に生かし、先進的な取り組みを行なっているかについて学んだ。

表5 フィールドトリップ日程

日付	訪問先自治体	訪問先施設
7月15日(土)	香南市赤岡町	絵金蔵 絵金祭り
7月16日(日) ～17日(月)	土佐清水市 宿毛市大月町	足摺岬国立公園 大月町文化教育交流施設COSA 柏島
7月22日(土)	高知市	桂浜 五台山(牧野植物園、竹林寺)
7月23日(日)	安芸市 室戸市	伊尾木洞 室戸ジオパーク むろと廃校水族館

## 5. グループワークオリエンテーション及び最終プレゼンテーション

学生たちは4つのグループ（各グループ3～4名）に分かれ、フィールドトリップの視察先を一つ選択し、「持続可能な観光」という視点から分析し、持続可能な観光の促進に向けた提案などを盛り込んだプレゼンテーションをプログラム最終日に行なった。プレゼンテーションに先立ち、本学教員によるオリエンテーションを実施し、グループごとにプレゼンテーションする視察先の決定、SWOT分析を用いたプレゼン内容の検討を行なった。

### (1) グループ1：大月町

大月町の強み（自然の豊かさ、漁業、農業など）、弱み（高齢化、宿泊施設の不足、アクセスの難しさなど）について分析し、COSAやむろと廃校水族館のような廃校を活用した観光分野での取り組み推進を提案した。

### (2) グループ2：むろと廃校水族館

水族館開設の背景、運営方法、展示方法などについて詳細に紹介し、そのユニークさや教育及びサステイナビリティ促進の取り組みを評価するとともに、更なる観光客の取り込みに向けて、公共交通アクセスや周辺の宿泊施設の充実を提案した。

### (3) グループ3：牧野植物園

植物園を訪問する客層、強み（植物の種類の高さ、周辺環境など）と弱み（階段の高さ、公共交通の少なさなど）の分析を行い、他の植物園と協力してスタンプブック（各園を訪問しスタンプを集め、より多くの集客を図るもの）を作成してはどうかという具体的なアイデアやより積極的なSNSの活用などの提案を行なった。

### (4) グループ4：COSA

施設の強み（自然豊かな周辺環境、芸術的な活動など）、弱み（アクセスの難しさ、周辺に商店や飲食店がないことなど）について分析を行い、SNSでの情報発信強化、バスなどを使ったアクセスの向上、具体的な季節ごとのイベント案を提案した。

以上のように、SNSを使って情報収集をすることが多い学生ならではの視点から、大半のグループがより効果的にSNSを使って情報発信をすることの重要性について言及していた。今後の展開として、訪問先の施設と学生が協力し、より効果的な情報発信のための意見交換やコンテンツの提案などを行うことをフィールドトリップの一部に含めることを検討している。

表6 プログラム終了後アンケートへの回答

設問	全体回答
プログラム全体の満足度 (5段階評価)	5 (非常に満足) : 11名 4 (満足) : 2名
プログラムの目的 (日本文化、高知県における観光分野の取り組みについて理解を深める) をどの程度達成できたか	達成できた : 7名 ほぼ達成できた : 4名 未回答 : 2名
プログラム参加後、中長期の海外留学 (1学期以上) に関心を持ったか	関心を持った : 11名 未回答 : 2名
自分の大学の友人に本プログラムへの参加を薦めたいと思うか (5段階評価)	5 (とてもそう思う) : 11名 4 (そう思う) : 1名 未回答 : 1名
プログラムの期間 (1ヶ月間) は適切だったと思うか	適切だった : 11名 適切ではなかった : 2名
クラスのサイズ (全体の参加人数14名) は適切だったと思うか	適切だった : 11名 まあまあ適切だった : 2名
学生コメント	
	フィールドトリップがとても素晴らしかった。安全でフレンドリーな環境で、本プログラムに参加したことは最高の思い出になった。(フレズノの学生)
	交換留学生と高知大生と一緒に楽しむことのできるアクティビティがたくさんあった。交換留学生と話す機会がたくさんあったことも良かった。(本学学生・人文社会科学部4年/男性)
	英語に親しむことができ、日本語を教えるという体験もできた。自信を持って英語で話せるようになった。(本学学生・人文社会科学部3年/女性)
	たくさんの人に会い、講義やフィールドワークなど素晴らしい時間を過ごすことができた。大学のスタッフはとてもフレンドリーで歓迎してくれ、問題があった時に手助けをしてくれた。(UCLANの学生)
	色々な文化講座やフィールドワークがあり、日本人学生と交流し、日本や日本文化について学ぶ機会がたくさんあった。(フレズノの学生)
	初めて留学生と交流するようなフィールドワークに参加することができて、非常に楽しかった。これからもこんなフィールドワークが続くと面白いのではないかと思う。(本学学生・農林海洋学部3年/女性)

## 6. 参加学生によるプログラムへの評価及びまとめ

サマープログラムの全日程終了後に参加学生に対し、プログラムに関するアンケートを実施し、参加者14名中13名から回答が得られた（表6参照）。

今回、協定校からの短期留学生数は4名と人数としては多くなかったものの、一人一人の希望を聞き取りながらプログラムを設計したことにより、プログラム終了後のアンケートにおいて、4名全員がプログラム全体の満足度5（非常に満足）と回答しており、「自分の大学の友人に本プログラムへの参加を薦めたいと思うか」という問いに対しても、4名全員が5（とてもそう思う）と答えている。また、10名の学生が「本プログラムに参加し、中長期の海外留学（1学期以上）に関心を持った」と回答した。本プログラムは、本学学生と協定校の学生の交流を深める貴重な機会となっただけではなく、海外留学への関心を喚起する機会にもなっていることが認められ、本プログラムの波及効果が明らかになった。

高知大学での滞在中、フレズノ校及びUCLANからの留学生は、自律学習支援センターが実施しているパートナーシッププログラム（語学交換プログラム）に登録するなど、積極的にプログラム参加者以外の高知大学生との交流を行っており、プログラム終了後も交流が続いている。

本プログラムは、高知大学生と協定校学生との交流を通じ、キャンパスの国際化を図ることを目的として実施しており、上記のような交流がプログラム期間中のみならず、プログラム終了後も続いていることは大変喜ばしいことである。GEASCはキャンパスの国際化に貢献する本プログラムの実施を今後も継続していく。

## 7. おわりに

今回のサマープログラムは、協定校からの留学生の参加は少数だったもののニーズに即した国際共修授業や日本文化講座、フィールドトリップ、グループワークなどを通して学生相互のコミュニケーションが十分に図れたため、満足度の高い交流ができたと言える。それがキャンパスの国際化の一環にも繋がり、参加した学生の中長期での海外留学への関心喚起や継続的な学生同士の交流にも一役買うという結果に繋がっている。

今後は協定校への周知を強化し、多くの参加者を募ることを計画しているが、本学が所有している宿舎やバス等には限りがあるため、サマープログラムを開催する際には、参加する留学生数に応じた住居の確保やフィールドト

リップの移動手段の手配を検討していく必要がある。また、時差の問題があるが、日本語授業を対面とオンラインにより開講し、現地からの参加を通してサマープログラムに興味を持ってもらい、中長期の留学に繋げていくことも検討していきたい。

## 注

- 1) 末松他 (2019) では、「国際共修」を「言語や文化背景の異なる学習者同士が、意味ある交流 (meaningful interaction) を通して多様な考え方を共有・理解・受容し、自己を再解釈する中で新しい価値観を創造する学習体験を指す。単に同じ教室や活動場所で時間を共にするのではなく、意見交換、グループワーク、プロジェクトなどの協働作業を通して、学習者が互いの物事へのアプローチ (考察・行動力) やコミュニケーションスタイルから学び合う。この知的交流の意義を振り返るメタ認知活動を、視野の拡大、異文化理解力の向上、批判的思考力の習得、自己効力感の増大などの自己成長につなげる正課内外活動を国際共修とする (p.iii)」のように定義しており、本稿もその定義に従うものとする。

## 参考文献

国連世界観光機関 (2005) 「持続可能な観光の定義」

<https://unwto-ap.org/why/tourism-definition/> (2023.12.26閲覧)

末松和子・秋庭裕子・米澤由香子 (2019) 『国際共修 文化的多様性を生かした授業実践へのアプローチ』 東信堂

ながの はな  
(高知大学グローバル教育支援センター特任助教)  
おおつか かおる  
(高知大学グローバル教育支援センター教授)  
Michael Sharpe  
(高知大学グローバル教育支援センター准教授)